

関東地方東部の前方後円形小墳

岩崎卓也

はじめに

1. 茨城県下の前方後円形小墳
2. 栃木県下の前方後円形小墳

「変則的古墳」をめぐって

3. 「変則的古墳」をめぐって
4. 前方後円墳の共同体的側面

おわりに

論文要旨

西日本では、6世紀になると前方後円墳の築造が急減するというのに、東日本では逆にそれがピークに達するかのようである。この対照的なあり方が何に由来するかを探るべく、東関東地方を中心に検討してみることにした。

東関東の前方後円墳には、前代にひき続いて築かれる首長墓としてのそれが存在する一方、小規模かつ帆立貝形ともいるべき形状を示し、群集墳の一構成要素として築かれるものが目立つようになる。後者の埋葬施設は、前方部それも旧地表面下に設けられるのが常で、首長墓としての前方後円墳の埋葬施設が後円丘の旧地表上に設けられることをたてまえとしているのと大きく異なっている。そしてこのような前方後円形小墳は、栃木・茨城・千葉3県にわたって広くみられるが、栃木県下のその埋葬施設が、基本的には横穴式石室の系譜をひくのに、茨城・千葉両県下では、箱式石棺を主要施設とする点で差異がある。後者は「変則的古墳」の名で夙に注目されてきたものである。

さて、考古学の方法では証明困難ではあるが前方後円墳は首長靈繼承儀礼の場として機能したと推測したい。その意味において、この墳形は首長と民衆との共同体的関係の表象としての意義をもっていた。だが首長連合の形成は、民衆との間の階級的格差を顕在化させていった。にもかかわらず、まだ十分な力量を持つに至らなかった6世紀の大和政権は、東日本では共同体的関係を挺子とする民衆支配体制の継続を志向した。いきおい、当時なお民衆と一体感をもって結ばれていた在地小首長層を、その体制下に組みこむこととなつた。こうして築かれるようになったのが、中・小の、とりわけ前方後円形小墳だったのではなかろうか。